専大生の「チカラ」

学業に、地域活性化に、ボランティアにとさまざまな場面で活躍する専大生の「チカラ」を紹介しよう

インドネシアに車いすを贈り続け

まちかどのフィランソロピスト賞

「支えられ、支える立場にもなりたい」

戸津亜里紗さん（ネット情報４）

インドネシアの子供たちに、車いすを贈る運動を続ける戸津亜里紗さん（ネット情報４）が、社会に役立つ寄付を行った人を顕彰する「第11回まちかどのフィランソロピスト賞」（日本フィランソロピー協会主催）の青少年部門賞に輝いた。

生まれつき全身の筋肉が弱い脊髄性筋委縮症の戸津さんは、小学校から普通学校に車いすで通い続けた。小５で電動車いすに切り替えた際、「使わなくなった車椅子を贈ろう」と考えたのが運動のきっかけ。ボランティア団体「空飛ぶ車いす」の協力を得て、10年間で30台以上の車いすをインドネシアの障がい児学校に寄贈した。その活動ぶりは昨年、全国紙など各紙に紹介され反響を呼んだ。「私の家にも使わなくなった車いすがある」など、寄贈の申し出が相次いだ。

東京・学士会館で12月1日に行われた同賞の表彰式でも2紙が紹介。活動の輪は大きく広がった。当日は衆院議員の加藤紘一氏もお祝いに駆けつけた。

母・薫（かおる）子さんと表彰式に出席し、特別賞の赤星憲広さん（阪神タイガース）らとともに表彰された戸津さんは「両親とたびたび訪れるジャカルタの街では、車いすがほとんど見られない。自宅に閉じこもる障がいを持つ子供たちが気になった。父（正勝さん＝国士舘大学政経学部教授）と相談してジャカルタの障がい児学校に贈った2台は、その学校で初めての車いすとなった。子どもたちからとても喜ばれ、お礼の手紙をもらった時の衝撃は忘れられない。『車いすがあった方がいい』という想像は『本当に必要』という確信につながった」と振り返った。

そして「私は多くの人に支えられてきたけれど、一人の人間としてほかの人を支える側にも立ちたい。春を待ちわびる小さな花に水と光を与えるような、フィランソロピー精神に満ちた社会のために努力していきます」と抱負を語った。会場は温かい拍手に包まれた。

※フィランソロピー＝ギリシャ語のフィラン（愛）とアンソロポス（人類）の合成語で、人類愛、慈善などの意味で使われる。米国では非営利団体などに寄付することを指し、日本では「社会貢献」の意味で使われている。

▲　笑顔で受賞あいさつをする戸津さん＝12月１日、東京・学士会館で

専大生が初の代表に

首都圏４大学（専修、上智、東洋、早稲田）

大学生意識調査プロジェクト

経営・石崎ゼミの市原さん、岡部さん、田中さん

首都圏の４大学（専修、上智、東洋、早稲田）で広告・マーケティングを学ぶ学生有志が、大学生の考えをまとめる第14回「大学生意識調査プロジェクトFUTURE2008」に、経営学部・石崎徹ゼミの市原玲菜さん、岡部梓さん、田中利奈さん（いずれも3年次生）の3学生が参加した。市原さんが専大生として初の代表を務めるなど3人とも大活躍。一連の作業は「自分を大きく成長させてくれた」と口をそろえる。

転機は9月に行われた2泊3日の合宿。自分たちの主張を〝主観を入れず〟論理的にまとめていくロジックチャートの作成などで連日徹夜となったが、アドバイザーに「自信を持て」と励まされ、「合宿を乗り越えたことで、自分の意見を言えるようになりました」。

参加30人ほどの例年に比べ今回のメンバーは9人と少なく、「一人ひとりの作業負担は大きかったが、やりがいは十分でした」と岡部さん。11月の発表会では、「元気いっぱい〝自分らしい〟発表ができました」と、満足そうに振り返った。

9人のまとめ役となった市原さんは「今回は人数が少ない分、全員が代表の役割を担った。大学間のカベを越え、参加学生の一体感が生まれました」と笑顔で話す。

論理のまとめ方や発表方法、時間の有効活用などが身につき、現在展開中の就職活動に生かされているという。

市原さんらメンバーの活動は、民放テレビの情報ドキュメンタリー番組でも紹介された。

同プロジェクトは、大学生約1000人を対象に、一定のテーマを基に調査設計、実査、集計、分析、発表までの一連の作業を広告代理店博報堂スタッフの指導を得て行う。今回のテーマは「大学生とケータイ」。4月のスタートから11月28日の都内でのメディア向け発表会まで、8カ月間にわたる長丁場をこなした。

「グループディスカッションで積極的に意見を述べることができず、みんなの作業についていくのがやっとでした」と話すのは田中さん。

▶　田中利奈さん

◀　市原玲菜さん

▲　発表する岡部梓さん

「映像のまち・かわさき」

推進フォーラムに協力

福富プロジェクト（ネット情報）

デジタルコンテンツ　使い地域活性化へ

ネットワーク情報学部の福富忠和教授は、デジタル技術、コンテンツなどを専門とする。3年次生によるプロジェクトでは今年度、「映像のまち・かわさき」推進フォーラムに協力。学びの場はキャンパス内にとどまらない。

推進フォーラムは、市内の映像関連産業の振興と地域の活性化による新たな都市の魅力創造に向け、交流・連携の場として設立された。福富プロジェクトはテーマを「IMAGING KAWASAKI」に設定し、フォーラムの委員会で「VJ（注＊）、カフェシネマ、マスコットキャラクター」の企画を提案したり、「映像コンテンツビジネスサロン」で橋本瑛史さんがVJを披露したりするなど、学びの成果を地域活性化につなげている。橋本さんは、川崎の魅力を若い感性で表現する「川崎市イメージアップCMコンテスト」で市長特別賞に選ばれるなど高い評価も得た（CMは川崎信用金庫店頭で1月、2月に週代わりで放映される）。

「海外ではVJイベントが盛んに行われており、人気も高い。この受賞をきっかけに多くの人に『VJ』を認知していただければうれしい」と話す橋本さんがチーフの班では、VJワークショップやVJを中心としたクラブイベントなど、映像作品とのコラボレーション企画を提案している。

（＊Visual Jokey＝クラブなどで行われている映像、音楽を融合したインタラクティブパフォーマンス）。

プロジェクトリーダーの長谷川雅弘さんは、「映画館＋カフェ＋多目的ギャラリー」を組み合わせた「カフェシネマ」の企画を担当。「何度も企画書を書き直しましたし、プレゼンでは厳しい意見もありましたが『学生の夢のプラン』という位置づけではなく、実現に向けての温かい励ましと受けとめています」。

2人とも「福富先生のネットワークで貴重な経験をさせてもらっています。期限を守る、公的な会議で発言するなど責任感をもって物事に取り組むことを学びました」と話している。

「マスコットキャラクター」の企画では、川崎市のマークをモチーフに宇佐美翔平さんがデザインした「かわさき マチ」が実現に向けて最終段階を迎えている。採用されれば、市のイベントなどで幅広く活用されることとなる。

▲　プロジェクト発表会で

9組が受賞

育友会奨励賞

第9回育友会奨励賞の表彰式が12月13日、神田キャンパスで行われた。特別賞1組を含む計9組が受賞し、日南川裕一育友会長から賞状を授与された。

【奨励賞】＝敬称略

▽原康晴（経済3）＝フェアトレード商品の販売企画▽戸津亜里紗（ネット情報4）▽体育会漕艇部＝平成20年度の活動を振り返って～日本選手権金1銀2銅3を獲得～▽小川信一郎（文4）＝全日本大学サッカー連盟学生幹事長▽『蒼翼の獅子たち』学生プロモーション（中村隼人・商3、清水裕・経済3）＝蒼翼の獅子たちに自らを重ねて▽北村静（経済3）＝ペットボトルキャップでワクチン支援▽囲碁部＝専修大学囲碁部の活動報告と今後の展望▽小室匡史（ネット情報4）＝社会知性の実践（ケース・スタディ）～専修大学における4年間の歩みから

【奨励賞特別賞】＝敬称略

▽笠原由覚（経営4）＝公認会計士を目指して

社会知性開発研究センターとキャリアデザインセンター

第２回かわしんビジネスフェアに出展

12月３、４の両日、川崎市のとどろきアリーナで開かれた「第２回かわしんビジネスフェア」（主催＝川崎信用金庫）に本学から、社会知性開発研究センター／都市政策研究センターとキャリアデザインセンターが出展し、産学連携の成果と今後の可能性をアピールした。

川崎市の都市・産業政策の再構築を目指した具体策の提言を目的に04年度からスタートした都市政策研究センターは、公開シンポジウムの成果や市に提出した「川崎都市白書」など、活発な活動報告を展示。川崎市と連携して、地域の課題を解決するインターンシップを実施しているキャリアデザインセンターは、今年度展開している16のプログラムから、「大豆栽培からつくるオンリーワン納豆」などの成果を披露し、学生の力を期待する多くの参加者の注目を集めた。

福富忠和プロジェクトも川崎市のブースに出展した。